

# 幼児対象の共同制作指導法の事例 — 学生による出張授業「みんなで大きな花火を描こう」を例に —

中島法晃

岐阜女子大学 文化創造学部

(2018年10月11日受理)

## A case of collaborative production teaching method for infants — A case of “Let’s draw big fireworks with everyone” as an example —

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,  
Gifu Women’s University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

NAKASHIMA Houkou

(Received October 11, 2018)

### 要 旨

本稿は、学生による幼稚園への出張授業でおこなった造形表現活動の事例である。W 幼稚園の年長クラス 132 名に対し、6 名の学生が授業者となって幼児とともに屋外で共同制作をおこなった。活動のねらいを明確にするために、何度も打ち合わせを繰り返した。幼児の動きを予測しながら活動の展開を計画する必要がある、複数の授業者で意思や認識を統一して臨むことの重要性が明らかになった。さらに、幼児にとっては、通常の保育時間の個人制作のお絵描きと同様に、共同制作においてもそれぞれ作品へ愛着を持つということが明らかになった。活動の最中に多く幼児の声を聞き、幼児の動きを観察し、集団の中でもそれぞれの幼児への声かけをすることで表現意欲が増し、達成感が増幅する。

キーワード：共同制作，出張授業，造形活動，表現指導法

### 1. はじめに

保育現場において、絵画または造形指導はどのようにおこなわれているのだろうか。私立幼稚園や保育園の案内チラシやウェブサイトなどを閲覧していると、「お絵描きの先生」や、「造形の専門家の先生」などの名称で週に1度程度、外部講師によって指導がおこなわれている園をいくつかみることができる。

外部講師による専門的な指導は、表現をおこなう幼児のみならず保育者にとっても指導法を学ぶことにつながると考えられる。村田（2010）が、保育現場での絵画・造形指導の現場の現状について、子どもの自由な表現を保証する立場から、「活動の場と材料を与えるだけで保育者による基本的な指導が全くされず、子どもに任せきりの例」[村田2010, p. 229]があると述べている。一方で、「保育

者によって表現の到達目標が設定され、そこに向かう方法も過程もあらかじめ定められた造形指導」[村田2010, p. 229]つまり、保育者の指導に従うことを幼児に求めることを重視する園も存在するという。いずれの場合も幼児施設の方針であるが、現場の保育者がどの程度表現活動についての意識をもっているかというのは明確ではない。幼児美術教育および造形指導法に関する論文や報告は幾多もあり、多角的な視点により様々な指導法が開発されたり見直されたりしながら次々と更新されているが、研究者の視点と現場の保育者の指導法との乖離は少なからず存在するのではないだろうか。事実、保育者への予備インタビューの中に、絵を描くことが苦手だから園のやり方にしたがっている、という声や、最初に指定されたお手本を見せて、子どもには真似をさせている、という声があった。保育者の真似をすることで子どもは描き方のコツを覚え、自分なりに表現を工夫していくようになるという事実は自明であると考えられるが、一方で、保育者の表現指導における不安や自信のなさを表す言葉であるとも考えられるのではないだろうか。

本稿では、保育者養成課程に在籍する学生が幼稚園でおこなった共同制作の実践について報告する。共同制作は、子どもの個性や協調性を育てながら創造性を育むことができるといわれている指導法のひとつであり、様々な幼稚園や保育所などでおこなわれている。戸潤(2008)は、幼児教育学生と幼児の共同制作の有用性について、「共同製作、共同活動することは園児にとって主体性や創造性を育むのに有効に働くことは当然のことのように確認された。」と述べ、さらに、「学生にとっては、共同作業することにより子どもの創造力や表現技術がどのように身に付くのか、活動が停滞する原因はどんなところにあるの

か、子どもの造形表現の自立はどのように発達していくのかなどが特に実感できる活動である」[戸潤2008, p. 9]と述べている。本稿において、共同制作において保育者養成校の学生が明確にねらいを持って指導に取り組む過程の記述を通して、共同制作の指導法のあり方を考察する。

## 2. 実践事例

本稿は、幼児の共同制作に焦点を当てるということから、事例の記述法は松井(2000)を参考にする。

タイトル「みんなで大きな花火を描こう！」

### 1) 対 象：

W 幼稚園年長児132名(全5クラス)

### 2) 授業者：岐阜女子大学文化創造学科初等教育学専攻中島ゼミ3年次学生5名および補助1名

### 3) 日 時：

2018年7月12日(木)10:00~11:30

### 4) 場 所：W 幼稚園運動場

### 5) 内 容：巨大な紙と大筆を使った書道パフォーマンスをし、文字の上を子ども達に歩き回ってもらい、絵の具がついた足型で花火の絵を制作する。

### 6) ねらい：

・学生の調査として、クラスごとで一定方向に歩く事や、使用できる色に制限がある為、制限の中で子ども達がどのように楽しんで表現遊びに取り組んでいくか、また、歩く制限の種類によって子ども達の反応がどの様に変まっていくかを観察する。活動にある程度の制限をかけた中で子ども達が制作遊びをする事で、想像力や表現力を伸ばす事ができるのではないかと考えることから、子どもが楽しみながら力を伸ばすことのできる制限の段階を調査する。

・子どもの活動として、普段の絵を描くという子どもの感覚の幅を広げ、ダイナミックに紙面を使ったり、色の混ざりの面白さに気づいたりすることで、子ども自身の表現の幅が広がり、それらを友達や保育者、家族と共有しようとする人間関係の広がりにつなげる。また、自分を表現することが苦手な幼児にとっても、インパクトが大きい活動を経験したことによって少しでも自己発揮や友達とのつながりを持てる変化を期待する。

#### 7) 準備:

5m×5mの紙2枚(書道パフォーマンス用紙をつなぎ合わせる)

アクリル絵の具(赤、青、黄)各2,000ml

巨大筆3本

バケツ6個

バット(容器)8個

雑巾(20枚程度)

養生シート 大4枚(紙の下に敷くため、一回り以上大きくなるように重ねる)

#### 8) 環境構成:

運動場に養生シートを敷き、その上に事前に切っておいた紙を貼り合わせ、5m四方の紙を2つ並べる。パフォーマンス用の筆と絵の具が入ったバケツを所定の位置に設置する。少し離れた場所に、巨大筆体験用の紙を設置した。2階のテラスには定点撮影用のビデオカメラを設置した(図1)。

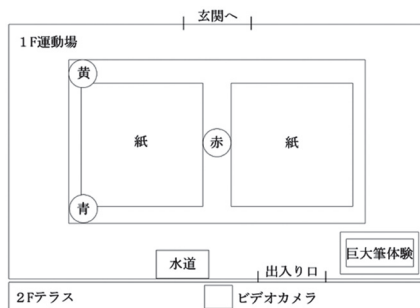


図1 環境構成

#### 9) タイムスケジュール

表1 タイムスケジュール

時間	活動の流れ	備考
9:00	幼稚園玄関集合 挨拶後、運動場で準備(5人) カメラ撮影開始 (MY※片付けまでの全てを記録する)	・ビニールシートを4枚広げ、固定 ・紙を敷き、養生テープで留め、裏返す ・絵の具、筆用意 ・足洗い用のバケツ、雑巾 ・定点撮影ビデオ設置
10:00	園児運動場集合、整列(5人で場所を誘導) 挨拶、司会(YS)	・幼児は水着にエプロンスモック、帽子を着用 ・クラスごとに所定の位置に誘導し、整列させる ・整列後、挨拶と導入(司会者からパフォーマーにバトンタッチ)
10:15	パフォーマンス(KC, SY, MY) 赤、黄、青の3色の色と3本の筆を使って「花火」の二文字を同時に書く 赤担当(SY) 黄担当(MY) 青担当(KC)	・炎天下の場合、絵の具が乾いてしまう可能性がある ・子どもの活動の際に足型がつかない可能性があるため、パフォーマンス後、絵の具は近くに置いておく
10:20	パフォーマンス終了 子どもの活動説明(SY)	△幼児は花火という漢字を知らない ・子どもの活動に入る前の花火に対するイメージ作りをするために花火の絵を見せる
10:25	子どもの活動開始 進行(SY) 5クラスの動き 1と5クラス:電車ごっこ の要領で外側からぐるぐる歩く 2と4クラス:紙の周りを囲み、真ん中にいる学生に向かって歩き、タッチしたら戻る 3クラス:紙の4隅に設置した足型のスタンプ台を踏んでから、白い場所のみを歩く	・子どもたちに様々な方向から紙の上ののってもらい、文字の上を足型で花火を表現できるように歩かせる ・ただ歩くだけではなく、足音で花火を表現するようなイメージを持たせる ・絵の具が乾いて足跡がつかない場合、近くに置いた絵の具を、花火の文字に沿って垂らす
11:00	子どもの活動終了 司会(KY)	・完成した作品を鑑賞するために2階に行く前に足を洗う(クラス担任がサポートしてくれるが、基本的には学生が指導する) ・2階のテラスは狭く、132名が全員同時に見ることができないため、クラスごとで移動して鑑賞する ・待っている間に巨大筆体験をおこなう
11:30	片付け完了	・2階テラスにて作品鑑賞後、幼児とともにクラスの教室へ行き、その後運動場へ戻り全員で撤収作業

## 10) 結 果：

夏休み直前の活動として、前日の雨の影響で涼しさを残しつつ、日光が眩しく運動場を照り返し、ほどよい夏の暑さの中での活動であった。3名の学生は朝9時に幼稚園の玄関に集合し、主任先生と年長クラスの各担任と打ち合わせをしている間、残りの学生は運動場でシートや紙を敷き道具を所定の位置に設置した(写真1)。屋外での活動ということと、絵の具を使用するということ、汚れてもそのままプールに行けるということから、主任先生との相談により、幼児の当日の服装は水着の上からエプロンスモックを身につけ、帽子を着用するということがであった。しかし今回の活動では、運動場での活動の後、幼児たちに2階から作品の全体を鑑賞させる時間を設けていたため、運動場での活動の後に足を洗う必要がある。そのため、幼児の動線を考え、足を洗うことがしやすい環境設定とした。

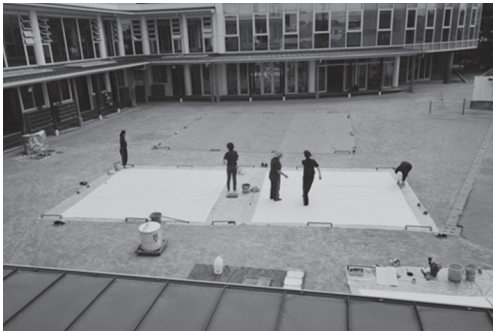


写真1 準備風景

9時50分頃、各クラス担任に引率してもらい、授業者である学生が待つ運動場に降りてきて整列した。挨拶後、パフォーマンスをおこなった。内容は、太鼓の音に合わせて3人の学生が筆を1本ずつ持ち、赤、青、黄の3色で分担し、「花」「火」と1角ごとに同時進行的に描くというものである(写真2)。5m四方の巨大な紙に、勢いよく描かれる線と、絵の具の飛び散りに驚きながらも、幼児たち

は時折歓声をあげながら筆の動き、学生の動きを目で追っていた。導入時には、何を描くかは伝えずに、大きな筆で何を描いているかを考えながら鑑賞してもらうように伝えた。



写真2 学生によるパフォーマンス

パフォーマンス終了後、代表の学生が幼児たちに向かって、「これは何を描いたでしょう?」と尋ねた。年長児はまだ「花火」という漢字を知らないが、驚くことに何名もの幼児から、「花火!」という声が聞こえてきた。パフォーマンス時の動きや絵の具の飛び散りやその色彩によって花火が連想されたのであろう。花火であることを改めて伝えた後、花火の形状や音について話し、幼児たちみんなで花火を描こうと伝えた。

描き方として、パフォーマンスによって描かれた花火の文字の上を歩くことで足の裏に付着した絵の具を利用して、スタンプングの要領で絵ができあがるというものを想定した。学生から、全幼児が自由に歩くのではなく、クラスごとで歩き方を変えるべきだという提案があった。話し合いにより、①最初のクラスは、電車ごっこの体制になりクラス全員を1列にさせ、紙の外側から中心に向かって絵を描くように歩き、中心に到達したら反対向きに絵を描くように歩いて紙から降りる(写真3)。②次のクラスは、まず学生が紙の中心に立ち、幼児が紙の周りを囲む。そして中心に立つ学生の元へ歩いて行き、学生に





写真3 ①1列になって歩く活動

タッチしてからまた紙の外へ出る(写真4)。③最後のクラスは、紙の四隅に50 cm 四方のバットに絵の具を染み込ませた雑巾を乗せたスタンプ台を置き、そこを踏んでから紙の白い部分を歩く(写真5)。という3行程でおこなった。「花」と「火」の2枚の紙があり、1, 5クラスが①の活動、2, 4クラスが②の活動、3クラスが③の活動をおこなった。この活動



写真4 ②中心に向かって歩く活動



写真5 ③白いところを歩く活動

は、基本的には、「紙の上を歩く」のみである。絵を描くというより、行為によって絵ができあがる。歩くという単純な行為の中で、色の混ざりかたや重なりかたなどの発見や感動を幼児同士、また幼児と保育者が伝え合うことを目的としていることもあり、幼児の絵を描くことの好き嫌いや得意不得意という概念をはずし、誰でも参加できる活動を計画した。幼稚園教育要領の保育内容表現、内容の取り扱いにあるように、素朴な自己表現を共に味わう機会となることをねらった。

活動の中で起きた問題として、1クラスが30名弱ということで、5 m 四方の紙の上に乗ると狭く感じて歩き方が窮屈そうに見える場面が幾つかあった。特に①の活動の場面では、1列になり手をつなぎ、なおかつ下を向いて歩いていたため、足を滑らせて転ぶ幼児がいたことで列が乱れてしまった。足を滑らせて転んでしまう幼児に関して、ある幼児はそれをおもしろがり、ある幼児は転んでお尻についた絵の具を嫌がったりする姿があった。転んで絵の具が足以外に付着したことで、体中に絵の具を塗りたくる幼児もいた。今回の活動は、あくまで「足型」のみで表現するということがあったが、そのように別の活動に展開している幼児の姿も散見した。

また、エプロンスモックおよび水着は、絵の具で汚れることを想定して着用したものであるが、いずれも洗ってもなかなか絵の具が落ちなかったという問題が生じた。本授業で使用した絵の具は水性のアクリル顔料であり、乾くと耐水性になる。アクリル顔料はお湯で洗うことで落ちやすくなるため、絵の具が落ちないという指摘後に保護者に伝えた。水着ではなく、汚れても良い服装を指定する必要がある。

幼児の活動を終わると、もともとは「花」「火」という文字だったものが、132名の幼

児のたくさんの足型によりカラフルな大きな花火の絵となった(写真6)。



写真6 完成

活動後、クラスごとに2階に移動して上から作品を鑑賞した。移動する前に洗い場である水道に集合し、担任と学生の協働で、幼児が3人入れるほどの桶の中に入らせ、足についた絵の具を洗い落とした(写真7)。2階から見下ろすスペースは132名全員入ることができないことから、1クラスごとの鑑賞とした。他のクラスは待機するクラスと、学生が使用した巨大筆を実際に使ってみる体験ブース(写真8)を設け、順次活動を進めた。

### 3. 考 察

本稿においておこなった出張授業に対して、「幼児の活動のねらいを明確にしたうえでどのような授業をおこなうことが効果的で



写真7 絵の具がついた足を洗う



写真8 巨大筆体験

あるか」という観点と、「授業者である学生の指導のあり方」という2つの観点から考察する。出張授業の企画打ち合わせの際、ゼミ生である6名により様々な企画があがった。その中で出てきた企画のキーワードは、「通常の保育時間ではできないこと」、「絵を描くことが苦手な子どもでも皆と同じように活動することができること」、「ただ遊ぶだけではなく、行為の先に感動があること」などであった。本出張授業の時期が夏であるということと、書道経験者が3名いるということから、今回の授業内容を決定した。

幼児の活動のねらいとして、第2節の6)で述べたように、普段の絵を描くという子どもの感覚の幅を広げ、ダイナミックに紙面を使ったり、色の混ざりの面白さに気づいたりすることで、子ども自身の表現の幅が広がり、それらを友達や保育者、家族と共有しようとする人間関係の広がりにつなげる。また、自分を表現することが苦手な幼児にとっても、インパクトが大きい活動を経験したことによって自己発揮ができたり友達とのつながりを持てたりするような活動にすることをねらいとした。クラスごとで歩く方向や動き方を変えろという制限を与えて活動をする中でも、幼児それぞれの特徴が浮かび上がる。足跡で色をつけていく活動でも、綺麗な混色になるように自分の足にどの色とどの色をつけ

るかを考えながら歩く幼児がいた。一方で、足元を見ずに色の上を歩き回る幼児がいた。共同制作の場合、全員に対して声かけをすることが困難であるが、保育者は特定の幼児だけではなく、多くの幼児を見渡し、その都度声かけをしていく必要がある。大きな紙の上をクラスごとで歩くという活動であったが、終了後に2階のテラスへ上がり見下ろした際に、「すごく綺麗で大きな絵だね。」「大きくてびっくり。」という驚きを表現する声が多かったが、その後に、「あの辺は僕が歩いて綺麗な色にしたところだよ。」や、「あのお尻の形、私が尻もちをついた場所だよ。」などの言葉が出てきた。幼児は自分が歩いた場所、綺麗な色にした場所を覚えているのである。幼稚園での普段の保育でのお絵描きの授業では、教室が汚れることや幼児の服が汚れるような内容が積極的におこなわれていると言いはない。今回は保育室を出て、思い切り汚れても良いという、通常のお絵描きの時間より大雑把な活動になるだろうという想定のもとでおこなった。それにより幼児にとって作品への愛着の程度が低くなる可能性を感じていたが、共同制作においても個人制作と同様に、これは自分の作品だという愛着が芽生えていることがわかる。

大人数での共同制作の場合、保育者には様々な役割が与えられる。今回、全5クラス132名の幼児を対象としたことから、クラスごとに担当を振り分け、授業者の声が聞こえない場合の声かけや、活動が進行している時の待機時間の際の声かけ、幼児の動きの誘導など、活動全てにおいて補助をする役割がある。これに関しては、授業者と補助担当者の意思が統一されていなければならない。綿密な打ち合わせとリハーサルが必要になってくるであろう。幼児にとって、メインの授業者と補助の保育者は同等の存在であるという認

識があるからだ。今回の共同制作は、授業を担当した学生にとって初めての経験であったため、幼児の動きを想像しながら、様々な角度から対応していくことを伝え合った。今回に関しては逸脱した動きをする幼児はなく、特別想定外な問題はなかったといえる。大人数での共同制作をおこなう場合、授業者または補助保育者全員が段取りを理解し、様々な動きを想定して活動に臨むべきである。今後も共同制作指導を実践していき、幼児への活動のねらいの明確化および指導の理論化についての議論を進めていきたい。

## 謝 辞

本稿において実践した共同制作は、岐阜市のW幼稚園で授業をさせていただきました。園長先生をはじめ、主任先生や年長クラスの各担任の先生方のご理解とご協力のおかげで無事に成功することができましたことを厚く御礼申し上げます。さらに、中島ゼミの6名の学生にとっては、出張授業や共同制作など、初めての経験が多かったですが、有意義なディスカッションを繰り返して計画を練ったことで今回の共同制作が素晴らしいものになりました。これを励みに今後も学修していきましょう。

## 参考文献

- 1) 戸潤幸夫(2008)「幼児教育学科生と付属幼稚園児との共同制作の有効性—共同性格活動の授業の分析から—」『大学造形美術教育研究』6 pp. 2-9
- 2) 松井寿美子(2000)「幼児の共同制作の指導(1)」『聖カタリナ女子短期大学紀要』33 pp. 37-54
- 3) 村田夕紀(2010)「幼児造形指導の試み—豊

- かな表現を引き出すために―』『四天王寺大  
学紀要』50 pp. 229-236
- 4) 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』  
フレーベル館